Be My Girl!

岬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｂｅ　Ｍｙ　Ｇｉｒｌ！

【Ｎコード】

Ｎ７３９４Ａ

【作者名】

岬

【あらすじ】

高神千歳は、お嬢様であることを隠して、男として高校に通うことになった。その目的は……？そして、無事に秘密を守り通すことは出来るのだろうか？波乱万丈な物語！（話が話なだけに、多少差別的な言葉も含まれるかも知れません。ご容赦ください）

０：プロローグ

私は、周りと比べて恵まれた子だったと思う。
裕福な家庭で、わがままを許されて育って来た。
それなりに格式ある家柄のせいか、厳しい面もあったけれど。
欲しいものは、望めばだいたい手に入った。
何より、大切に育てられたという自覚もある。
これ以上を求めては欲張り過ぎなのだと、わかっている。

……でも。

たったひとつ、手に入れたいもののために。
自分が自分でいる限り、絶対に手に入らないもののために。
今の自分を捨てて、他の人間になりたいと、焦がれるときがある。
思ってはいけないことなのだと。
罪ですらあるのだと、言い聞かせても。
私には、そんな自分を捨てることはできなかった。

そして、中途半端のまま。
私は私のまま、１６年生きた。
長い人生の、まだ１６年分かもしれない。
けれど、何もせずに過ごすには、長すぎる時間。

変わらなければいけない。

そう、思った。
このまま過ごした後の、表面だけの幸せと。
自分でつかみとろうと動いた後の、不確定な未来を天秤にかけたとき。

理解されなくていい。
世間知らずと、非難されてもいい。
きっと、生ぬるいあたたかさが欲しいんじゃない。

私はただ、自分の手で未来を決めてみたい。
たったひとつの、叶わない願いのためにあがいてみたいだけ。

それが“生きてる”ってことだと思うから……。

――

そして私は、１６歳になる前日、決心した。

高神千歳という、ひとりの人間として生きるために。

1：高神千歳

高宮学園高校。
県内有数の進学校にして、私立の男子高校である。県内1、2を争う学力があり、あらゆる運動部が全国で名を知られている。
そんな文武両道の校風から、近県でも有名で、遠い地からそこに志望する生徒も少なくない。そのため、全校生徒が宿泊可能な、大きく立派な寮も完備してある。
当然倍率は高く、生徒は金持または能力ある人物に限られている。
編入できる者など、なおさら絞られてしまう。

そんな学校に、今日から高神千歳（たかがみちとせ）は転入することになった。
ある大きな秘密を抱えて。

（うわ、大きいなー……）

車の窓ガラス越しに高宮学園高校の校舎を見て、そこに今日から通う、高神千歳はぽかんと口を開けていた。
自分の実家も屋敷と評されるほど大きなものであるが、何百人が通うお金持高校はスケールが大きい。わかっていたとはいえ、千歳が想像していた以上に。
車の運転手は、そんな千歳の様子に気付いたらしい。彼は、眼前に広がる高校の駐車場に向かいながら、暖かい苦笑を持った声をかけた。

「千歳さま。そんなに驚いていて大丈夫ですか？今日から在学することになるのですよ」

バックミラーを通して穏やかな黒い瞳と自分の目が合い、千歳は不

意に恥ずかしくなった。半開きの口を閉じ、静かに座席に座り直す。

「うん。わかってるんだけど、初めて見たから、つい。
手続きは全部お祖父さまにしてもらったし……」

言い訳じみた言葉が、千歳の口をついて出た。
自分の立場を考えると、そうせずにはいられなかったからだ。
仮にも、千歳は“良家の子”。本人がどんな人物であれ、それは変わらない立場だ。まして、これからそのような人が多い学校に行くとなると、礼儀正しくしなければならない。
それなのに、早速注意されるとは。

「千歳さまは自然のままで十分だとは思いますけれどね。気を張りすぎるのもよくないですし。あなたは正真正銘“お嬢様”なのですから、礼儀作法も心得ていらっしゃいます。心配しなくても大丈夫ですよ」

穏やかな、それこそ見習いたい物腰を持つ運転手・畠山は、千歳を励ました。
ありがとう、畠山、と青年に返すと、千歳はシートにもたれかかり、目を閉じた。無意識に、長かった髪をばっさり切り落とし、短髪になった頭を撫でる。

（礼儀作法は確かにどうにかなるとしても。問題は“お嬢様”なことを隠して“良家の子息”として男子高に通うことだよね）

男子高校に通う女である自分の身を思い返し、溜息をつきながら、千歳はこれまでの経過を思い返した。

―――

そう、こんな事態になったきっかけは。
１６歳の誕生日に、千歳が祖父・高神宮蔵（たかがみみやぞう）に放った爆弾発言だった。

「一世一大のお願いです。今年の誕生日プレゼントとして、高宮学園高校に通わせて下さい！」

自分がそう言ったときの、あんぐりと大口を開けた祖父の顔を、千歳は一生忘れないだろう。あんな祖父の顔を見たのは、初めてかもしれない。
彼は滅多に驚かないのだ。変わったものが大好きで、ちょっとやそっとのことでは揺らがない精神の持ち主だから。
でも、今回はさすがの祖父だって驚くだろうなとは思っていた。いや、祖父でなくても、誰だって驚くだろう。

孫“娘”が“男子高”に入りたいと言いだしたら。

口を開けたままの祖父を見上げながら、千歳は静かに返事を待った。
常識では考えられない願いに、祖父はどう思うのだろうか。世間知らずの箱入り孫娘が無茶なわがままを言っただけ、と捉えるかもしれない。
沈黙に満たされた時間は、彼女の不安を募らせた。だが、それでも、と千歳はすぐに暗い気持ちを打ち消す。
それでも、決めたのだ。絶対これだけは他人に否定されてもあきらめない、と……。
この屋敷でこんなことを相談できる人は祖父しか考えられない。

何より、高宮学園高校は祖父が経営しているのだ。あながち不可能ではないはず。

ロングスカートの裾を握り締めて、不安げに見上げる孫娘の姿を捉え、高神宮蔵は言った。その顔に、柔らかい笑顔をのせて。

「……よく、考えて決めたことだね？」

「もちろんです」

「なら、いいんじゃないか」

「え？」

望んでいた返事が返ってきたにもかかわらず、その呆気なさに思わず聞き返す千歳。

その様子を見ながら、祖父は繰り返した。

「いいんじゃないか。お前のことだから、悩んで悩んで悩みまくった末だろう。おもしろくて一番いい誕生日プレゼントじゃないか」

そう言って、彼はいたずらっこのような笑顔を浮かべた。あっさり許されたことに驚いたままの千歳に、宮蔵はにこやかに続けた。

「第一、滅多にお前はわがままを言わないじゃないか。ちょっとおじいちゃんは寂しかったぞ。

絶対叶えてやるから、安心しなさい」

――――

……それが、高神千歳が男子として高宮学園高校に転入することになった始めの一歩である。
ゆえに、千歳はある秘密、本当は“女”であることを隠しながら転入することとなった。

もちろん、転入にこぎつけるまでには、たくさんの障害はあった。
幸い、学力には問題がなかったが、中学・高校と女子だけに囲まれて育ったため、男子と接することができるか。
家族にどう説明するのか。
極めつけはやはり、女であることをバレないように、どうすればいいか。

祖父と相談し、寮には入るが理事長である祖父の親戚という設定で、一人部屋にしてもらうことになった。
期間は、長くても今年いっぱいが限界だと言われた。すまなそうに言う祖父に、こんなにまでしてもらったのだから、と千歳が申し訳なくなる。
そして、すでに高宮学園高校に勤務・在学中の、祖父が信頼できる二人が千歳のクラスに回るよう手配された。
一人は祖父いわく彼の友人で、教師。
もう一人は高神家の屋敷で働く運転手の弟。
どちらも面識があり、千歳のことを始めから知っているため、フォローしてくれる。かなり気が楽になるはずだった。特に後者は、小さい頃よく遊んでいたので、精神的にもありがたい。

（かなり不安だけど、自分で決めたことだし。やらなくちゃ）

「本当におひとりで大丈夫ですか？せめて職員のところまでは、私が……」

「大丈夫。それくらい、一人で行けるから。下手に目立ちたくないし」
「……そうですか。では、本当に本当にお気をつけて。
宮蔵様のご友人も私のいたらない弟もいますけれど、何かあったらすぐに！屋敷に連絡して下さいね……。
それから……」
「わかってる、大丈夫だから。
無理はしないし、できるだけ連絡はとる。何かある前に逃げるか、なりふり構わずに大声で助けを呼ぶ。だよね？」

いささか過保護すぎる畠山に、千歳は苦笑した。

ありがたいが、そろそろ耳にタコができそうだ。
けれど、畠山の暖かすぎる気遣いで、千歳はいくらか心がほぐれたのを感じた。

「ええ、ええ、そうです。お気をつけて、頑張って下さいね……」
「ありがとう。……そろそろ行くね」

その言葉を最後に、校舎に向かうことにした千歳。
本当にありがとう、屋敷のみんなにもよろしく、との彼女の言葉に、畠山青年は深く深く礼をした。
歩く途中、一度だけちらと振り返った彼女の目に、同じ姿勢でそこに立つ彼の姿が映った。

1：高神千歳（後書き）

つたない話で展開も遅いですが、興味を持っていただけたならば、
これからよろしくお願いします。
千歳達の物語に、どうぞおつきあいくださいませ。

2：転校生

整然と言うには、ずれて並んだ机。思い思いに着崩した制服を来た男子生徒達。
そういったものでうめつくされた部屋。
夏休みを二週間後に控え、どこか浮ついた雰囲気がただよう、高宮学園高校1年A組の教室である。

そこは、男子高の一室であるために、正直むさくるしい。最近は、夏の暑さがそれに拍車をかけている。
生徒達はウダウダ文句を言いながらもなじんでいるが、何も知らない者がうっかり入り込んでしまったら、何秒ともたずに逃げ出して来るだろう。
しかも、いつでもガヤガヤと騒がしい。
それも、今朝は特別、喧騒がいつもの3割増し。滅多にない、“転校生が来る”というイベントのためだ。

その珍しい“転校生”に、朝ホームルーム前の教室中そこここで、好き勝手に噂が飛び交っている。

「なー、転校生って高宮千歳って言うんだろ？どんなヤツだろうな」
「さぁ？かなり頭いいんじゃねえの。ウチ一応進学校なのに、編入してくるくらいだし」
「あ！ソイツのこと俺聞いた！理事長の親戚なんだってよ」
「何それ、おれお近付きになりてーよー！」

そう言った生徒に、ギャハハハ、という形容がぴったりな笑い声があがる。
入学して3か月が過ぎ、進学校での勉強中心の単調な生活にも慣れ

た彼らは、楽しめることなら何でも楽しんでやろうと思っているのだ。

そして。
ぎゃいぎゃい騒ぐ1年A組の教室を前にして、がちがちに緊張した生徒がひとり立っていた。真剣そのもの、といった面持ちで、何度目になるかわからない吸って吐いてを行っていた。

（うう、緊張する。
せっかくここまでこぎつけたんだから、行かないと！頑張れ自分！！）

心の中でつぶやくと、その生徒は左拳を握りしめて、引戸に右手をかけた。
しかし、後一歩踏み出せずに、戸を開けられず、結局、弱々しく手をおろす。左手も自然とほどかれた。

「や、やっぱだめだぁ……」

生徒は、泣き言をもらし、肩をおとしてうなだれてしまった。ちなみにこの行動を、もう10回は繰り返している。
真新しい高宮学園高校の制服に身を包んだ、男子高生にしては小柄なこの生徒は、高神千歳。
教室内であらゆる噂が飛び交っている、“転校生”である。ここの理事長の孫にして、大きな秘密を持ってこの学園にやって来た。
その姿は、小柄な上にメガネをかけていて、ひ弱な印象が先に立つ。
さきほどからの頼りなげなしぐさが、それをひきたたせている。

「オイ、まだ入んねえのか、高神千歳」

そんな千歳をみかねたように、背後から深みのある低い声がかかった。
千歳が声につられて後ろを見ると、やる着なくワイシャツを着崩した男が、腕組みして立っている。
千歳にとってはこのクラスでただ2人、自分の本当の意味で味方といえる内1人。自分の抱える秘密を知っている人物。
高宮学園高校1年A組の副担にして、千歳の祖父曰く彼の親友、織田直政（おだなおまさ）だ。

荒々しい声に、千歳はびくりと身を揺らす。もともと、祖父の友達として何回か会っていたが、怖そうなイメージが先に立ち、どうにも苦手だった。

「ごめんなさい……」
「あー、まあ、謝ることじゃねえから。お前もいきなり環境が変わるから不安だろうし。
……第一、こんなうるせえ男どもの巣窟じゃなあ」

千歳の態度を見て、織田は、バツが悪そうに脱色しすぎのボサボサ頭をかいた。無精髭さえ剃ればそれなりに決まりそうな顔が、子供を泣かせてしまったかのように情けない顔になる。
織田がうるさいと言うとおり、教室からは階の端まで聞こえそうな騒ぎ声がもれている。

それは、今まで自分が経験したことのない世界で。
正直、怖い。
千歳は、少しずつ、入る意思が削りとられていくような気がした。

（せっかく屋敷の人みんなが応援してくれたんだから、行かなくちゃ……だめ、なのに……）

自分ではどうにもできないことに、足がすくみそうになる。
千歳の表情がくもったのを察した織田が、つとめて明るい声で千歳に呼び掛ける。こんな役目、俺の柄じゃねえのに、と苦く思いながら。

「ここまで来たんだ、行くしかねぇだろ。大丈夫だ。俺も亨もお前をサポートしてやっから。ほら、行くぞ」
「あ、待っ……」

千歳の肩を軽く叩き、織田が一気に戸を引いた。心の準備ができていない千歳が、静止をあげるよりも速く。
そうしてしまった後、千歳にできることと言ったら、織田が教卓に向かって行くのに必死でついて行くことだけだった。

――――

副担はともかく、その後をちょこまかとついて入って来た小柄な影に、教室内の騒がしさがぴたりと収まる。各々が席に着き、見慣れない生徒を凝視しだした。
なあ、転校生ってアイツ？とか、小せえ。なんか暗そうだな、とか。
ある程度抑えられた、しかし千歳にも辛うじて聞こえる声量で、ささやき声がかわされる。
それが気になって、うつむき気味にそらしていた視線をあげた千歳

は、軽く後悔した。
千歳を見る、好奇の目、目、目。クラス中の視線が、自分に集中している。

（どうしよ、怖い……）

再び視線をおとしそうになったが、不意に耳によみがえった声にそれをこらえた。
それは、忙しくてほとんど家にいない父親より慕っている祖父の言葉だ。

（人前では、胸を張る。そして、できる限り、柔らかい笑顔で……）

そうすればみんな、お前に“いちころ”だよ、といたずらっぽく笑った彼の顔が浮かぶ。
少しだけ、気持ちがさわやかになったように感じた。
彼の言葉を信じて、千歳は目線をあげた。そして、ぎこちないながら、微笑む。笑顔自体はメガネに遮られて隠れてしまっていても、雰囲気が変わったことは伝わったらしい。

（ひ弱そうっつうより、守ってやりたい感じ……）
（暗そうかも、って思ったけど。なんとなく、小動物みたいでかわいい）

なかなかに好意的に受け止められたようだ。

織田は、クラスをざっと見渡して反応を確かめると、大丈夫そうだな、と判断する。
その途中、一番後ろの席の、窓側から2列目の生徒に目線で頷いた。
その生徒も、軽く目を伏せて答える。

一連の動作を数秒で終えたあと、教卓から、出席簿を取り出すと、織田は声を張り上げた。

「えー、聞いてるだろうが、コイツは転校生だ。高神千歳。仲良くしてやれ。板書はめんどくせえからしねえ。字が知りたけりゃ本人に聞け」

何それ、織田ちゃん適当ー、とブーイングがあがる。だが、織田はひょうひょうと受け流すと、挨拶するように千歳を促した。
慌てたように姿勢を正し、千歳は勢いよく頭を下げた。身に染み付いたもののせいか、きれいな角度で。

「え、えっと……高神千歳です！どうぞよろしくお願いします……」

はにかんだそれは、やはり保護欲をくすぐるものであったようだ。
クラス全体が、和やかな雰囲気で千歳を迎えいれた。
織田が彼にしては珍しく、ほっとしたように小さな溜息をついて、再び声を上げる。

「まぁよろしくやれよ。
高神千歳、窓側一番後ろの席な。畠山亨ってヤツの隣り」

出席簿で指し示された方向を、千歳が目線でたどった。
そこにあった名前通りの見知った顔に、ほっとした息をもらす。自分の顔が、自然に顔がほころぶのを感じた。
彼が秘密を知る人物の2人目にして、クラスメイトの畠山亨。千歳の実家に雇われ、運転手をしている人の弟で、小さい頃はよく一瞬に遊んだものである。
……もっとも、中学になると、自然と疎遠になってしまったのだが。

久しぶりに会った幼馴染みとの再会に、千歳は、足取り軽く席に向かった。
途中、よろしく、とか後ではなそーぜ、とか声をかけられて、萎縮しつつも素直に嬉しかったので、笑顔で答えることができた。
ストン、と指定された席のイスに腰をおろすと、千歳は隣りに笑いかける。

「よろしくね、亨ちゃん」

小声で言うと、無愛想な答えが返って来た。

「……よろしく」

ちらりとしか視線をよこされず、千歳は、久しぶりの再会に浮ついた自分が悲しくなる。もっと、感動してくれるかと思っていたのに。

久しぶりに見た畠山亨は、見た目は大人っぽくはなったものの、昔の面影を残していた。
柔らかい髪は少し茶色くなっている。背も小学校のとき、最後に見たときより随分伸びたようだ。
けれど、何より印象に残る、女子顔負けのかわいいという表現がぴったりの顔立ちは変わっていない。更に美人になった感はあるが。
容姿に面影があるだけ、変わってしまった態度に余計悲しくなる。
しゅんとした千歳を見てか、無愛想ながらも亨は説明をいれる。

「ごめん……久しぶりだから。なんか調子でなくて」

その言葉に、千歳は、うつむいていた顔をあげ、亨の方を見た。あいにく目はそらされていたが、顔がほんのり赤くなっているのが見て取れた。
一瞬前まで暗くなりかけていた気持ちが一気に持ち直す。

（あ、フォローいれてくれるとこは変わってない）

思い、胸を撫で下ろすと同時に、別の感情も持った。
……照れてる、かわいいかも。
けれど千歳は、彼が昔そう言うとすねてしまっていたことを思いだし、言葉には出さなかった。

そのとき、授業始めるぞ、との緒田の声がかかる。

……これからが、自分との戦いの始まりなのだ。

千歳は、今までの道程を振り返って、思う。

いまやっと、自分はスタートラインに立てたのだ。
正直、不安で不安でたまらなくて、今すぐにでも回れ右して帰りたい思いがあったが。
ここにいる2人を始めとして、自分には、たくさんの人が協力してくれたのだ。だからこそ自分は、常識では考えられないことでも、ここにいられる。自分で決めた通りに。

（目標は……男子高のここで、女だってばれないこと。自分が納得いくまで）

高神千歳は、机の下で、こっそり拳を握りしめて、決意をあらたに

した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7394a/

Be My Girl!

2011年1月27日04時34分発行